

# 不登校・ひきこもりに『伴走』して

NPO 法人レインボーハウス 土井 広行

## 第1回 息切れした子どもたち

突然ですが、みなさんの周りに学校に行くのが辛そうだったり、家から出られなくなっている子どもや青年はいませんか。

4月になると、子どもたちは「さあ、この1年がんばろう」と心の中で気合いを入れます。前年度に学校に行けた子どもも行けなかった子どもも、みんな同じです。しかし、進学や進級で勉強が難しくなり、人間関係の変化など新しい環境になるので、子どもたちにとってはエネルギーを消耗する大変な時期です。その大変な4月を乗り切るために、子どもたちは最初に入れた気合いで学校を休まないようにがんばるのです。

そんなギリギリの状態でがんばり続けている子どもたちが、息切れして学校に行けなくなる人が多い第一の時期がゴールデンウィーク明け、そう今の時期なのです。夏休みや冬休みなど長い休みをきっかけに、学校に行けなくなる人が多いのです。

これらの時期になると、私がスタッフをしているレインボーハウスにも「子どもが、学校に行かなくなって…」という保護者の方からの問い合わせが増えてきます。問い合わせの後、すぐに子どもをレインボーハウスに行かせようとする方もいますが、「無理に連れてくることはしないで下さい。本人が『行きたい』と言いつつまで待つてあげて下さい」と言うようにしています。家から出られなかった子どもが、ゆっくり家でエネルギーを回復する中で、学校には行けないが外出はできるようになることも多いです。

そんな子どもを持つ保護者の方たちが「不登校の子どもたちが安心して通うことができ、回復へのステップの1つになるような『居場所』がほしい」という声を上げたことが、レインボーハウス設立のきっかけになりました。関係機関やたくさんの方に助けていただきながら、1997年4月に開所しました。2001年には特定非営利活動（NPO）法人に認証され、昨年度は延べ900人以上の子ども、青年が来てくれました。

そのレインボーハウスに幸運にも開所前の準備からかかわることができ、不登校の子どもやひきこもりの青年と接してきた中で、私が経験させてもらったことや感じたことを書きたいと思っています。

**土井広行** 1974年、大阪府堺市生まれ。和歌山大学教育学部在学中、不登校児を支援するクラブ「プラットホーム」で活動。卒業後、レインボーハウスのスタッフ。

< 2007年5月5日 ニュース和歌山掲載 >